

シンポジウム

破壊と創造 —第一次世界大戦とイギリス作家たち—

河内 恵子

イギリスは 19 世紀に世界最大・最強の国家となったがその原動力の基盤となっていたのは中産階級（ブルジョワジー）の人びとであった。経済力と政治力においても国家の中心層をなしていた彼らが強く望んだのは大英帝国の繁栄と自らの階級の安定であった。1851 年に成功裡に終わった第 1 回ロンドン万国博覧会はイギリスの力を対外的に証明すると同時にイギリス国民の総意のエネルギーを対内的に確認することになり中産階級を中心としたイギリス国民の安定志向はますます強くなった。合理主義精神と常識と道徳律を重視する彼らの考えは偏狭な独善主義や愛国主義と表裏一体の関係にあった。こうしたさまざまな価値基準がヴィクトリア朝時代の時代精神、ヴィクトリアニズムの根幹をなしていた。しかし、19 世紀末が近づくにつれ、ヴィクトリアニズムに亀裂が入るのが、いや、急いで付け加えるならば、もともと存在していた矛盾が明らかになってきたのが、確かにみえた。

産業と経済の面で独走していたはずのイギリスにヨーロッパの他国が追いついてきた。当然のことながら、植民地獲得戦争に勝利するのも容易ではなくなってくる。国内では、1880 年代になると、自立と男性との平等の権利を求める「新しい女」the New Woman が登場し、芸術・文学の領域では、常識という中産階級の価値観の対極に位置するデカダンス、唯美主義を表明するいわゆる世紀末作家たちが活躍した。簡単に纏めると、ヴィクトリアニズムの底辺を支える、結婚制度や家父長主義という考え方が揺れ動いたのだ。それに付け加えて、大英帝国の頂点に座し、イギリス国民をまとめる、ヴィクトリア女王が、高齢のためか、国民の前にその姿

をみせる頻度が減った。世紀末にすぐれたゴシック小説が登場したのは、この時代の国民の不安

をすくいあげ、書き、その不安を増大することに長けた作家たちがいたからだ。R. L. スティーヴンソンの『ジキルとハイド』、ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』、H. G. ウェルズの『モロー博士の島』、オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』などが代表作としてあげられるだろう。ヴィクトリア女王の死去。新しい世紀の始まり。文学世界ではいわゆるイギリス文学の伝統を整理するかのように、種々の文学史やアンソロジーが発表され、新しい文学を目指す趣旨をもつ文芸協会が設立されたり、また多様性にみちた文芸誌(そのうちの多くは短命であったが)が発行された。新しい手法を小説創作の場で試す実験的な作家もいれば、19世紀に一定の読者を獲得していたロマンスを書き続け大きな利益を得る女性作家も複数存在していた。ヴィクトリア朝小説の根底を形成していたリアリズム小説を受け継ぐ作家もいれば、ゴシック小説に現代性を持ち込もうとする作家もいた。20世紀初頭のイギリス小説は何でもありの状態だった。

この時期の文学地図では迷路が錯綜する。

しかし、19世紀後半にイギリス国民が抱いていた不安感は、解消されるどころか、ますます強くなっていった。華やかに映るエドワード朝期ではあるが、海外との競争が多方面で必要となってくるというのに、軍の力は脆弱化していたし、国内ではさまざまな価値観がせめぎあっていて、国民の総意をまとめるような存在は皆無だった。漠然とした不安感は、ヨーロッパの地図を大きく書き換えることになる第一次世界大戦が勃発した時に過酷な現実へと変わる。だが、多くのイギリス国民は事情が理解できず、年末(1914年)には戦争が終わると信じていた。

文学はこの時代のイギリスを多角的に描き出していく。戦争の巨大なエネルギーのただなかで、作家たちは書き続けたが、その多様性の世界はヴィクトリアニズムと19世紀後半に出現した反ヴィクトリアニズムに端を発している。第一次世界大戦を契機に大きく発展していくモダニズム文学とヴィクトリア朝文学の距離はきわめて近いのだ。(日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第14回全国大会 2014年11月8日)

